

相模女子大学蔵平家物語 (古典文庫所収) について

高橋 貞一

はしがき

平家物語の諸本についての最初の研究は、山田孝雄博士の『平家物語考』（明治四十四年）である。その書の特質は、諸本を灌頂卷の存在によって、二分して、更に劔巻、鏡巻等の存在によって異本を分類したのである。これは形式的な分類であつた。灌頂卷の成立を後の成立として、灌頂卷のない諸本を前出としたことが特に注目される。これは誤といはねばならない。又諸異本の本文を比較検討されなかつたのが惜しまれる。本文の比較検討といつても、一章二章を比較した人は多いが、全巻を比較検討した人は少いのである。灌頂卷のない屋代本を先出として比較した例が多い。筆者は全巻の本文の異同、変化流動より考察して、一方流本、八坂流本、増補せ

られた本（長門本盛衰記、延慶本）の三大部に分ち、更に一方流本を、寛一本（奥書による）、寛一本より流布本（元和頃の版本）に生る諸本、流布本に三大別し、八坂流本を、成立の順に従つて、甲類本、乙類本、傍系の丙類本、丁類（最後に成立した諸本）の四類に分つた。『平家物語諸本の研究』（昭和十八年富山房刊）にこれを示したのである。然し昭和年代平家物語研究者でこれを認めた人はなく、山田孝雄博士の分類に従つて、灌頂卷のない八坂流本の屋代本（屋代弘賢旧蔵による）を最古とした論をした人々は、渥美かをる、富倉徳次郎等であつた。最近の山下宏明氏もこの考である。平家物語の寛一本を最古本といふのは筆者のみか。筆者の論を知るのは講談社の平家物語上下の文庫本の解説を見ても知る程度であらうか。残念である。

今度発見せられた相模女子大学蔵の平家物語は筆者の考察によれば、平家物語の本文の変化流動には語りの手（平曲）の盲人の外に改訂者と認むべき人々の存在が推定せられ、一方流本、八坂流本の混交があつたことが推定せられるので、注目すべき伝本と認められる。誠に貴重な伝本である。

相模女子大学蔵本は、原本は未見であるが、十二巻、古典文庫所収で、巻一——巻四、巻五——巻八、（巻九——巻十二）の三回にわたつて刊行せられた。巻を追つて検討してゆくこととする。三回は未刊。

巻 一

寛一本は章段なく書き続けである。本書も亦同じ。巻頭に章段名がある。岩波古典大系本（龍谷大学蔵本）も同じ。これは後の補入である。本書の印刷にはカッコでこれを示してゐる。

（殿上のやみうち）

○紅、浅、深のかみ、まきあげのきぬ、（筆）

き、よ、う、(寛悟)つかまつらず
しさいあるによつて、(かの間)、

(猶) そのとがあるべく候は、(べくは)、
進すべく候か(進すべきか)

○さいあいの女房の局に(最愛の女房をもつてかよはれるが、ある時其女房のつぼねに)脱字なり

○にるを友とかやのふぜいに、忠盛刑部卿になりて、(忠盛もおいたりければ、彼女房もゆうなりけり、かくて、を脱す)

○(六波羅殿の御一家の君達といひてしかば。花族も英雄も脱字。

(平家のゐいぐわ)

○重盛内大臣の左大将、嫡孫維盛四位の少将、
そうじて一門(脱字あり)

○平城天皇の御宇大同四年(寛一本なし)

○花山院の左大臣殿の御台はん所にならせ給ひて、きんたちあまたまし／＼けりの頃に、御ゆはひの夜、いかなる物のし事にてかありけん、花山の院の四あしの門に

花の山たかき梢と聞えしに、海士の子共か
ふるめひろふは

とある。これは盛衰記卷二の文によつたと推

定せられる(巻五以下に盛衰記によつた文があるによる)。八坂流乙類本、中院本にもこの歌がある。(きこえしに)。

(妓王妓女)

寛一本は祇王祇女の章はなく、高野辰之博士の旧蔵本(高野本)のみこれを有する。岩波古典大系所収本。従つてこの祇王祇女の章が本来あつたものか、又は後の増補かは決定し難い。唯寛一本以後の伝本に比して古き本文として認められるのである。この相模女子大蔵本の祇王妓女は、これを比較してみるに、かなりの差がある。はじめに、

さるほどに、入道相國はかやうに一矢四海をたなごころににきらせ給ひしかば、よのそしりをもかへりみず、人のあさけりをもは、かり給はず、ふしぎの事をのみし給ひけり、たとへばその比、京中にしらびやうしの上手、妓王妓女とて兄弟あり、
とあり高野本と略同文であるが、百二十句本に近い文である。又、

あねの妓王をさいあいして、西八條の宿所にとりすへてそをかれたる、かゝりければ妹の妓女をも、人をもんじてもてなしけり

は、寛一本、百二十句本に異なり、佐々木博士旧蔵の天理図書館本に類する。

入道最愛シテ西八條ニソ取居玉ヒケル、コレニヨテ
とある。

毎月百両の車に米をつませをくられければ、は他に類本なし。白拍子の起源は、「妓の字をつかぬ物もおほかりけり」の次に述べる。他本と異なる特質である。

○京中にほとけとゆふなるあそび物一人出きたり、むかしよりおほくのおそび物ありといへ共、これほどの物はなしとて、京中の上下こぞりてこれをもてなしけり

この文は、八坂流乙類本の中院本(古活字本)の文と同文である。妓王の言葉も中院本に類する。

「君をはじめてみる時」は今様歌の次に、
○をよそ此御ぜんは、としも十六なり、かみのかゝり、まゆのすがた、こゑよくふしも上手なりければ、なじかはまひもそんずべき、心をもよはずまふたりける、けんもんの子ども、耳目をおどろかさずといふ事なし(入道まひにやめで給けん、ほとけに

こゝろをうつされける、てんせい此入道殿は、いらくしき人にて、(おはしければ、まひのはつるをもをそしとおもはれけん) はじめわかうたはせて、せめのわかをいまだうたひもはてざるにほとけをいだいて入給ふ

あるのも中院本に類する。中院本の本文より前に成立した文か。中院本とやや異なる所もある。中院本、

さらばぎわうをこそいださめとあれば、仏御前それまいよくこゝろうくさぶらいなん、もろともにめしをかれまいらせんだに、はづかしうもかたはらいたうもさぶらうべし、ましてきわう御ぜんをいたさせおはしまさん事、いかでかさるうき事さぶらふべき、まことに後までもはすれぬ御事ならば、またこそまいりさぶらはめ、けふはたゞいとまをたびていださせ給へと申ければ

とある、傍線を附した所は本書と異なる所である。

〇もえ出るもかる、もの歌の次に、いまさらに行べきかたもおぼえぬになにと

なみだのさきにたつらん

の歌がある。中院本には、車に乗る時に、いづちともいつべきかたもおぼえぬになとなみだのさきにたつらんと詠む。

〇妓王再び西八條に参りて、今様、月ふけ風おさまりてのち、心のおくを、たづぬればほとけもむかしは凡夫なりわれらもおもへばほとけなり

と歌ふ。寛一本(中院本)とも異なり本書のみの異文。

〇かくて春すぎ夏たけ(ぬ)、秋のはつ風：以下後半は寛一本(高野本)と略同文である。これによつて推測するに前半は八坂流本によりて改訂せんとしたが後半は寛一本によりてそのままにしたものか。

(二代后)
(額うち論)

〇伊吉かむすめのはらに(伊吉兼盛が娘、寛一本)。

〇清水寺におしよせて、(仏閣僧房一字も残さず)やきはらふ、脱字か。
清水寺やけたりけるあした、観音火坑變成

池はいかに、脱字か。

(殿下ののりあひ)

〇世のみたれにをもよばず、世のみだれをめけるこんぼんは、(他本なし)嘉應二年：。

〇鷹共あまたすゑさせひめもすかりくらし

(脱字)。

〇昭宝公より此かた、未だうけ給をよばず(脱字)。

(ししのたにのむぼん)

〇小松殿大納言(右大将)にておはしけるが。

〇浄憲法師(御供仕る、其夜の酒宴に。此由を浄憲法師に仰あはせらる)。脱字あり。

(鵜河いきさ)

〇在廳なり(成章は京の者、熟根賤しき下臈なり)こんていわらは。脱字あり。

(後二條の関白殿願立)

(御こしふり)

〇安元三年七月廿三日、日たつの一てんに(四月十三日。寛一本、盛衰記)

(大内裏ゑんしやう)

〇保安四年七月に神興入洛の時は、祇園の別当権の僧都澄意に仰て、閑燭にをよんで祇

園の社へ入奉らる、神輿に立所の矢をば：
…（寛一本に比し脱字多し）

以上巻一をみるに、寛一本に比して脱字と認められる所がかなりある。その他は寛一本よりは後出と認むべき語もありて、平家物語の語りの変動と推定せられる。唯妓王妓女の章（前半）のみは特別の本文と認められよう。

巻二

（明雲座主のながされ）

○安元三年五月五日、天台座主明雲大僧正公請をとめられ、闕官せられ給ふうへ、藏人を御つかひにて、如意輪の御本尊をめし返したてまつりて、御持僧を改易せらる、すなはち使庁使をつけ、こんと内裏へ神興ふりたてまつりし衆徒の張本をめされけりとある。傍線を附した所は寛一本と差のある所である。これは八坂流乙類本の中院本（慶長年中刊行の平假名交り十行古活字本）と本文である。（文字つかひは本書は漢字で中院本は假名が多いはいふまでもない）。

○ほいなげにて、出られけり（いきどをりふかくていでられけり、中院本）けふやがて

都のうちを追出すべしとて

○追立の鬱使がさきにけたてまいらせ（りやうそうしらがさきにけたてまいらせ、中院本）

○年来すでに身の内にひせられける（ねんらい御心中にひせられける、中院本、寛一本）

○濁世末代といひながら（さかひと申ながら）、ちようけん是をふそくせられて、まつせといへどありがたきに、中院本……此明雲と申は……（寛一本と文の順序異なる）

○彼大しやうの幽幅なり、此日域のゑいがくは（彼ぐわつしりのりやうぜんは、ていとものうほくにそばだて、大しやうのいうくつなり、このじちいきのゑいがくは、中院本）

本書は脱字がある。以上の如く両本互に差があり、前後関係を確定し難いによりて同類本と認むべきであらうか。

（行綱かかへり忠）

（西光法師かきられ）

（新大納言の召籠）

○いかにいつしか其をんをわすれて、当家をかたぶけんとけつかうはし給ひけるぞ（それに何事のいこんかのこりて、此一門をほろぼすべきよし、けつこうはしたまひけるぞ、中院本、何の遺恨をもつて、此一門ほろぼすべき由御結構は候けるやらん、寛一本）

（小松殿のけうくん）

（丹波少将めしこめ）

成経の御所を出る條の最後、
○少将も今をかぎりとおもはれければ、そゝろにそてをそぬらされける（中院本）本書なし

（けうくん状）

○あたをば恩をもつてほうせられぬとぞ仰られける、國にいさむる臣あれば……。

中院本には、

くはほうをそめでたうて、大じんの大しやうにいたり給はめ、よきぎたいはい人にこえ、さいちさいかく世にすぐるべきやと、時の人かんぜられける

とありて、寛一本と同じである。大山寺本にはこの語がなく、八坂流の一派にはこの語りがなかったと認められ注目せられる。

(大納言のながされ)

大納言成親の経歴に、

○安元々年七月五日正二位(同三年四月十三

日、寛一本) 同二年十月廿七日、檢非違

使の別当……(安元々年十月廿七日、……

寛一本)

盛衰記卷七、承安二年七月廿一日從二位、同三年四月十三日正二位、安元元十一月二十八日、檢非違使別当とある。

(あこやの松)

○奥州もむかしは六十六郡にてありしを、文武天皇大宝年中に、十二郡さきわけて出羽の國とはなづけられたり(むかしはこくなりけるを、もんむ天皇の御宇、慶雲のころ、十二ぐんをさきわけてではの國とはなづけられたり、(中院本)

(大納言の死去)

大納言死去の事の前に、康頼出家の事があ

る。
○やすよりはながされける時に、周防室津海

にて出家入道し、ほうみやう性照とぞ名のりける

つるにかくそむきはてける世の中をとく捨ざりし事ぞくやしき

寛一本は卷二、康頼祝言の條にある。

以上卷二は中院本と同類本である。相互に少し差があり、前後を決定し難いが、八坂流乙類本と認むべきである。卷三も中院本に類する。寛一本の卷二の徳大寺の沙汰なく次に続く。

卷 三

(法皇くはんちやうの事)

(山門の衆徒堂衆のあらそい)

(いわうが嶋ののつと)

○露のいのちおしむべきにあらね共(くさばのすゑにすがれる露の命きえやらんことを、をしむべきにはあらねとも、中院本、つゆの命草葉のすゑにかゝりて、をしむべきにはあらねども、寛一本)

○林塘のたへなるあり、山の氣色、木の本立(りんたうのたへなるあり、こうきんしるの……いろことんなし、山のけしき木のこと

たち、中院本)

○あきのころも身をまとひ、きりめのわらじのなぎの葉、いなりの王子やしろのすきのはたむけつゝ、くろめにつくとぞくわんじけるけがらはしき心ある時は(中院本同文、寛一本なし)

本書の祝言と中院本の祝言とは少しく差がある。

(卒都姿ながし)

○梵天帝尺四大天王、そうじて日本六十余州の大小の神祇(ほんてんたいしやく、けんらう地神、わうじやうのちんじゆ、しよ大明神、中院本)

(漢朝の蘇武が事)

以上で寛一本は卷二を終る。卷の分割に注目すべきである。本書は中院本と同じ。

(めしかへし)

○さる程に太政の入道殿の第二の御むすめ、中宮にてわたらせ給ひけるが、治承二年の春のころより、御悩とて、雲のうへ天が下のきはきなるうへ、平家の人々ことにおどろきあはれけり、醫家くすりをつくし、陰陽の術をきはめ、諸寺に御誦経をこなわ

れ、諸社にくわんへいを奉らる（中院本同じ）

にて始まる。寛一本の巻三の巻頭の文なし。右の傍線の所は大山寺本に類する語である。

百二十句本、大山寺本等はある、本書は大山寺本をうけた文であらうか。

○御くわいにと聞えさせ給ひしかば、又引かへたる御よろこびにてぞありける、主上十八、中宮廿（二）にならせ給ふ、皇子いまだ出来させ給はず、わうじにてましませば、いかばかりかはめでたからまし、たゞ今わうじなどのたんじやうあるやうに、あらましことをぞ申あはれける。[△]星宿仏菩薩につめては、御産平安、貴僧高僧におはせては、皇子誕生とぞ申させける……

これは全く大山寺本の本文と同一である。

○きさは月のかさなるにしたがひて、御身をのみくるしくせさせおはしまして、供御もつや／＼きこしめし入させ給はず、御寝もうちとけならず、翡翠の御かんざし、御目のうへに所せく、おもやせさせ給ひたる御気色、なをらうたくぞみえさせ給ふ、さる程に漢の李夫人の……（中院本同文）

傍線を附した所は、寛一本にはなく、

一たびゑめば面の媚ありけむ漢の李夫人：

とある。大山寺本（その系統本とも認められよう）によつたといふべきであらうか。

次に門脇宰相教盛が重盛にあひて、成経の恩赦をねがふ辺より後は、大山寺本は大略寛一本に類し、本書と異なる文である。本書は中院本と略同文である。本書には脱字と認むべき所がある。

船にのせて九國の地まで具し給ひ、そののちすて給へかしとの給へば、少将、さそおぼしめされ候らん

中院本、

舟にのせて、せめて九こくの地までぐし給へ、をの／＼のまし／＼つる程こそは、春はつばくらめ、秋はたのもののかりの、をとづれつるやうに、こきやうの事をもつたへき／＼つれ、今より後は、いつの世にかはきくべきなれば、かひなき命ながらへて、うきめを見んよりは、なみのしたにしづまばやとなきたまへば、少将さぞおぼしめされ候らん（寛一本略同文）

とある。「天にあふひてかなしめば、まつふ

くかぜぞこたへける、地にふしてなげ／＼ば、きしうつなみぞおとつれける（以上、寛一本もなし）中院本あり。

（御さんのまき）

御産の勝事、甑の事、掃部頭時晴の事、公卿参内の後にありて寛一本と順序反対である。中院本同じ。大山寺本に類する。大山寺と関係があらう。

（頼蒙が霊）

（大塔さうりう）

寛一本と順序がさかさまである。中院本と文に少し差がある。

（丹波の少将都入）

○康頼入道もそゝろに袖をぬらしける、とあるが、中院本は、

やすより入道も、そゝろにあはれに思ひて、あるじをば花のかすみにたぐへつ、ころのまゝににほふ梅がえ

などながめつ、袖をぞしほりける、

とある。本書は脱文か。この歌他の本になし。

（ありわうが嶋下）

寛一本には亀王の事なし。（二方流本なし）○ありわう、かめわうとて二人候けるが、と

もにしろのことをかなしみけるが、かめわうはそのおもひのつもりにや、程なくうせにけり、ありわうはあはた口のへんにしのびて候けるが……(中院本同文)

百二十句本も亀王の事あり、天理図書館の佐々木本もある。これら八坂流甲類本の伝本の影響か。

○(俊寛のわか君) 三月九日につゐにうせさせ給ひ候ぬ、ひめ君はかりこそならに御わたり候へその文は候とて

とある。中院本の此方の死去を脱して居り、姫君の事に、「さて御わたりをこそ、たかき山ふかきうみともたのみまいらせ候へ」「これをかほにをしあてゝ、しばらく物もの給はず、やゝありての給けるは」も脱字である。

(小松殿の死去)

○維盛、夏の事なれば、浄衣のしたに薄色のきぬをきて、なにとなく所の水にたはぶれ給ひけるが、薄色のきぬのぬれ、浄衣にうつりける、ひとへにいろいろのごとし(盛衰記に類す)

○その比都にはじめていできたりける、こんなかたばらをき給たりしが、一むらさめに

ぬれて、しやうえにうつりたりける、ひとへに色のごとし(中院本)(覚一本と差あり)

(むもんの太刀わたし)

「むもんの太刀わたし」の中に、「金わたしの事」あり。中院本に同じ。

(法師もんだう)

燈籠の事なし(中院本同じ)

入道相國の閉門の事あり、中院本なし。

(関白のながされ)

○堀河の関白忠義公の御弟法興院の大道、

いまだ大納言の右大将にておはしけるをおつかへし奉りて……

中院本は、

御おとゝほりかはの関白ちうぎこう、其

時はいまだじゆ二位の中納言にておはしき、

其御おとゝほこ院の大道殿かねいへこう、

その時はいまだ大納言、右大将にてま

しくければ、ちうぎこうは御おとゝに

かゝいこえられさせ給たりしが、今さらこ

えかへし奉りて……(覚一本略同文)

とあり、本書は脱文である。

○五尺の身おき所なし、一生ほどなしといへ

ども、一日くらしかたしとて(五しやくの身をき所なし、夜のうちに……中院本、脱字)

(法皇鳥羽のりきう)

中院本と略同文である。

以上巻三は八坂流乙類の中院本と同文と認められよう。

唯覚一本の巻二の後半と巻三を巻三としたことは注目すべきである。

巻 四

(高倉の院いつくしま御幸)

覚一本に類し備中内侍の事がある。本文は

覚一本と僅かな差がある。

宝剣出し奉る(わたししてまつる、覚)

内侍所、しるしの御はこ(備中内侍、しる

しの御箱、覚)

庭火のかげも(閑院殿には、火のかげも、

覚)

出家の人の准三后の宣旨(出家入道の後も

英雄はつきせずとぞみえし、出家の人の……

覚) 脱字。

還御の條の歌もすべて覚一本に同じ。

(より政のむほん)

○しづまらず(しづからならず、覚)

○おやつり給ふ程に(おやつり給ふ、かくし
てあかしくらし給ふほどに、覚) 脱字か。

○四十六世(四十八世、覚)(四十六代、大
山寺本)

(源氏そるへ)

○三郎成治ナシ(脱)

○陰陽白河なる所(陰陽頭安倍泰親がもとへ
行、おりふし宿所にはなかりけり、白河な
る所、覚) 脱字か。

○それへたづね行、やがて勘状(それたつね
ゆき、泰親にあふ、勅定のおもむき仰すれ
ば、やがて勘状、覚) 脱字か。

(信連かつせん)

○(いけどりにこそせられけれ)、其後をさ
がせば、脱字。

(たかくらの宮三井寺おち)

(きほふの滝口馬の事)

○平家の侍共(おほくなみいたりける平家の
侍共、覚) 脱字。

○響はめて引出せ仲綱めにのれ、うてはれな
ど(駈おいてひきだせ、ひきだせ仲綱めの

れ仲綱めうてはれ、など、覚)

○にて(覚一本、て。岩波大系本は後の変化
か)

(三のよみ物)

右の章段名は注目せられる。山門牒状(三
状あり)に特別のよび方をしたもののか。

○園城寺牒す、延暦寺の衙、……蒙て当寺の

仏法破滅……ほつする状、(差あり)

○仏法をほろほし又王法をうしなはんとほつ
す(覚一本と差あり)

○にはかに入寺(ひそかに入寺)、頻りに責

あり(せめあり)出し奉るべき事あたはず
(出したてまつるにあたはず)、彼禪門武

士を当寺にいれとす、仏法の破滅此時にあ
たる、抑延暦園城は……(差あり)

○(園城寺牒す、興福寺の衙)(覚一本あ
り)、かうふりて、当寺の仏法破滅を(い

たして当寺の破滅を)殊勝は、……為也
(殊勝なる事は、王法をまぼらんとため)

こゝに傾年よりこのかた入道相國、(大山
寺本同じ、覚一本なし、盛衰記同じ)

清盛入道、ほしいままに仏法をほろほし朝
威をみだる(清盛公法名浄海、ほしいまゝ

に國威をひそかにし朝威をみたり)、彼禪

門官軍をはなちつかはすべきよし其聞えあ
り(武士を貴寺にいれんとす)、諸衆なん

ぞ愁歎せざらんや(なし、大山寺本あり)

これをふせぐ、中つぐに南都れみなく(こ
れをふせぐ、王権猶かくの如し、何に況や、

謀叛八逆の輩においてをや、就中に南都は
例なくて)

太政大臣入道浄海、貴寺の仏法を(入道浄
海が為に、貴寺の仏法を)伏せず(伏すべ

し)十二月、信賴卿むほんの時太上天皇一

戦の功を感じ(太上天皇……)子々相承の
庄園つみやみや、家々(大山寺本)こと葉

なし、しかる間、ますく勝にのるあまり
に(物いふ事なし、勝にのるあまり)

○稱する間(稱するによて)、宮、四角をう
ちかこみ(宮をうちかこみ奉るといへども

(宮をうちかこむところに)、八幡三所、
賀茂(八幡三所)、仙蹕を貴寺にをくりつ

く、身命を捨て守護し奉る條(仙蹕をさ
げたてまつり、貴寺におくりつけて、新羅

のとぼそにあづけたてまつる、王法つくべ
からざるむねあきらけし、随つて又貴寺身

命をすてて守護したてまつる條）、本書の誤脱か。十八日大しゆにふれ十九日辰の一点に（十八日、辰の一点に大衆ををこし）
覺一本脱字か。

以上三つの書状を見るに、漢字のみの書状としたものもあつて、読み方に種々の差を生じ、他の伝本を参照して語りの上からは一定し難い文となつたのであらうか。

五智院の但馬、慶秀が房人（五智院の但馬慶秀が坊人（五智院の但馬、乘内房阿闍梨、慶秀が房人）一千人（二千五百余人）

（宇治はしの合戦）

○馬筏をくんでわたして、其日の合戦にうちかちぬ、とね河をわたせはこそわたしけめ（覺一本脱字か）宇夫方次郎なし（脱字）

無官無位にして（なる物が、覺）下てに取付て（下手にとりつき）あかゝはをどし（あかをとし）三人は（は三人ながら）

（頼政のうちに）

○三位入道七十にあまりいくさして（源三位入道の類のこてふせぎ矢い給ふ、三位入道十にあまりていくさして（脱字か）

仕つべし共おほへ候はず（仕ともおほえ候はず）いづれの矢とばしらぬ共（いづれの矢とおほえねど）御めのとなどが（御ちの人などが）いづくにかわたらせ給ふべき

（頼盛卿力及ばでこのよしを入道相國に申されけり、何條其御所ならではいづくへかわたらせ給ふべからん）本書は脱字か。

女院ちからおよはで宮を（女院ちからおよばせ給はで、つるに宮を）、女院をはじめまいらせて、袖をしぼらぬは（女院をはじめまいらせて局の女房、めの童にいたるまで、涙をながし袖をしぼらぬは）脱字か。

（頼政の鶴射事）

○往し寛治（去ぬる寛治、本書、往しんとある所多し。朝家に（頼政申けるは、昔より朝家に、脱字か）

（三井寺はつかう）

○三井寺を（三井寺をも南都をも）、都合一万よきに（都合其勢一万餘騎で）

宝殿より、はるかに（宝殿よりあまくだりはるかに）一夏の供花も（一夏の花も）たゞ事にあらず（たゞ事ともおぼえず）

以上、本書は覺一本と同文と認むべく、同

類本としては、わづかに差があり、平曲上の流動といふべく後出といへようか。

巻五

（都うつり）

覺一本との差を少し示せば、

○とてきはぎあへり（こはいかにとてきはぎあへり。九條殿の御子息、凡人の次男に加階こえられ給ふ（九條殿の御子、右大將良通卿こえられ給ひけり。摂祿の臣の御子息凡人の次男に加階こえられ給ふ事、……）脱字か。

三十度にをよべり（三十度にあまり、四十度にをよべり）内の郡に都をたて（こほりくみやこをたて）よろひかぶと（くろがねのよろひかぶと）三條の広路（異國には三條の広路、興し秦阿房殿をたて、あらげ、秦阿房殿ををこして）

（月見、実定の都かへり）

○隨身をもて（隨身に）つらからめ（物ならめ）藏人かつりて（藏人かへりまいて）（ふくはらのもつけ）

○所爲といふさためて（所爲といふ沙汰に

て) あまた付て朝夕ひまなく(あまたつけれられ、あさゆふひまなく) 武内的大臣(武内的大明神)

青侍やがて逐電(かの夢見たる青侍やがて逐電) 後世のいとなみの外あるまじき事

(後世菩提の外は世のいとなみ) 脱字か。

(大庭がはや馬)

○の給ひし間(なげきの給ひし)、ゆるさるべき(ゆるさせ給ふべき)(ひがみの河次本書なし) かけられにき、今の世に(かける、此世に)

(かんやうきう)

○丹(丹といふもの) まうでして(詣して)

馬の角の変するに(馬角の変に) され共水にも(されどもちとも水にも) せられん時(へられん時) 始皇帝を(げにも始皇帝を) 又こゝに秦巫陽(又秦舞陽) いだかれり

(いだかりけり) かた山(ある片山) 管弦をしけるを(管絃をするを) つくれり(つもれり) 荆軻は玉のきざはしを上げるが

(荆軻は燕の指図をもち、秦舞陽は樊於期が首をもち珠のきざ橋をのぼりあがる) 脱字か。燕の差図の入たる櫃のそこに(燕の

指図ならびに樊於期が首げざんにいるゝところに指図の入たる櫃のそこに) 脱字か。

(もんかくあらきやう)

○平治元年に(平治元年十二月) ためさん

(ためいて見ん) 数十丈(数千丈) とつて

きたるぞ(こゝへはとつてきたるぞ) のこる所なく行ひ、飛鳥も(のこる所なくおこなひまはりて、さすが尚ふる里や恋しかり

けん、宮こへのぼりたりければ凡とぶ鳥も。) 脱字か。

(文竟が勧進帳)

(かたちにふけり(酒にふける) 院中のさど

うなのめならず(公卿殿上人も、こはいかにく)とさはがれければ、御遊もはや荒に

けり院中のさうどうなのめならず) 脱文か。えたりやおうと(太刀をすてて、えたりや

をうと) 下部にたぶ、引はられて(下部にひはられて) いづくにも(どこにも) 遠路の間、土産粮料(遠路の間で候、土産粮

料)

(頼朝の院宣)

○とぶらひ奉れば(この十餘年頸にかけ、山々寺々おがみまはり、とぶらひたてまつ

れば) 脱字か。

院宣をこそ下されける、兵衛佐、あつはれ

(院宣をこそ下されけれ、聖これをくびに

かけ、又三日といふに、伊豆國へくだりつ

く。兵衛佐あつはれ) 脱文か。帝都(帝

魃) さうく(にはやく) よみたりけると

かや、(寛、かなし)

(高倉新院殿島の願文)

○法性山しづかに(法性雲閑也)、かたかたあふく(旁扇ぐ) あまねく聞(あまねくき

こゆるには) 汁敷の行を企つ(十敷の行を

くはたてんとおもふ) 色紙(書写し奉る色紙) 手づからみづから金泥……(書写した

てまつる金泥……) 朝より容非をいのり(朝に祈る客一にあらず) 塵にへたたる、

ねがはくは(塵をへたつ、仰願、願文の読み方には諸本異同が多い。

おほひすくないはしり候はず(おほひやら

う、すくないやらうをばしり候はず)

十月廿三日にもなりけるに、夜に入て(十月廿三日にもなりぬ、あすは源平富士河に

て矢合とさだめたりけるに夜に入て) 脱文か。

この外に脱字と認むべき所が若干あるが略す。

(南都多んしやう)

○東金堂におはします自然湧出の觀世音、

(東金堂におはします仏法最初の釈迦の像、西金堂におはします自然湧出の觀世音)

天下も衰微せん事疑なし(天下も衰微すべしとあそばされたり、されば天下の衰微せん事も疑なしとぞ見えたりける)

以上、卷五は脱字と認める所があるが覺一本と本文と認むべきであらう。

卷 六

(高倉の院崩御)

○物の音もふきならさず、藤氏の公卿(物の音もふきならさず、舞樂も奏せず、吉野のくずもまいらず、藤氏の公卿)脱字か。百二十句本、吉野のくずもまいらず、なし。覺一本と本文と認められよう。

むなしきけふりとのぼらせ(むなしきけふりとならせ)本書よきか。仁徳の行を(仁徳の孝を)行がよい。風すさまじき朝(風すさまじかりける朝)御方もなし(御方もまします)上童(中宮の御方に候はせ給

ふ女房のめしつかひける上童)脱字か。

(小督の殿)

○此女房と申は(此女房は)、御書を取り出して奉る、やがて御返事書きひきむすび(御書とりいだひてたてまつる、ありつる女房

とりついで小督殿にまいらせたり、あけて見給へば、まことに君の御書なりけり、やがて御返事かきひきむすび)本書脱文か。

こよひばかりの名ごりをおしみてす、むれば、(こよひばかりの名残をおしみて、今は夜もふけぬ、たちきく人もあらじなどす、むれば)これも脱字か。

(東國西國の源氏蜂起)

覺一本と小異がある。

(太政入道死去)

○すわしつるは、見つる事とてさ、やきけり(すはしつる事をとぞさ、やきける)南閭浮第一の金銅十六丈(覺一本第一、なし)

(自心房尊惠瑛魔の庁に屈請)

○子の刻ばかりに、又さきのごとくに(子刻に及て眠切なるが故に、住房にかへてうちふす、丑刻ばかりに又先のごとくに(たゞ

ねがはくは証大菩提の直道をしめし給へ(たゞ願はくは我を哀愍して出離生死の方法をおし)証大菩提の直道をしめし給へ)脱文か。他に小異があるが略す。

(祇園の女御)

○助務僧正(如無僧都)

行家の矢作河合戦の條、「平家やがておしよせ責めおとされぬ」(平家やがて押寄せめ給へば、こらへずして、そこをも又せめおとされぬ)脱字か。この外覺一本と少しく差があるが略す。

次に宗論がある。百二十句本に、流沙葱嶺として卷六に所収、故に本書もその影響として卷六に収めたか。他の本は十卷の末に所収。岩波日本古典文学大系本は、卷十の末に収める。文章は伝本によりて差がある。百二十句本(流沙葱嶺)は、屋代本の抜書の卷、同六巻の内の流沙葱嶺と本文である。漢字が多いので、屋代本を示せば、

寛治二年正月十五日、臣下卿上仙洞ニテ御遊宴ノ初ニ、種々ノ御談議共有リケル中ニ、或人、抑當時天竺三如来出世坐々テ、説法利生シ給ト聞及シニ、參テ聴聞シテンヤト

とある。一方流本にある宗論は又差がある。拙著、講談社文庫、平家物語巻下の補注を参照されたい。

巻 七

云、一言出タリケルニ、大臣公卿皆可参トソ被申ケル、其中ニ江師匡房末右大弁三位ニテ、末座ニ候ハレケルガ申サレケルハ、人々ハ御参候共、匡房ニ於テハ可参共不覺ト被申ケレバ、月卿雲脚成疑心ヲ、人々ノ皆参ラント申サル、中ニ、御迎一人参ラジト被申子細如何ンゾヤ、匡房重ヲ被申ケルハ、本朝大宋ノ間ハ尋常ノ海路ナレバ、安キ方モ候ナレ、天竺震旦ノ堺ハ流沙葱嶺ノ嶮難渡ガタク難越、先葱嶺ト云山ハ、西北ハ大雪山ニ繼キ、東南ハ海隅ヘ聳ヘ出タリ、此山ヲ堺テ、東ヲ震旦ト云、西ヲ天竺ト名付ク、路ノ遠サハ三千余里、草木モ不生水モ無シ、銀漢ニ臨テ日ヲ暮シ、白雲ヲ蹈テ天ニ徹ル多ノ嶮難有……

本書の宗論も屋代本と内容は同一であるが文章は差がある。本書には傍線を付した所を缺く点があり、後出か。最後にも、

白河院の御宇二月

とあつて以下缺損である。屋代本には、

白河院加様ニ高野ヲ執シ思召レタリシカバ、其御子ニテ清盛ニ高野ノ大塔ヲ修理セラレケルニヤ不思議也シ事共ナリ

(平家の北國下向)

寿永二年三月上旬、兵衛佐と木曾の冠者と不快の事あり、木曾、めのと子の今井四郎兼平を使者にて、兵衛佐殿へいひをくりけるは、いかなるしさいあつてか、義仲うたむとはし給ふぞ、たゞし十郎藏人殿こそ、御迎をうらむる事ありとおはしたるを、義仲さへすげなくもてなし申さむ事いかゞと存候へば、うちつれ申てこそ候へ、是も又御いしゆふかゝるべし共存ぜず。

とある。覚一本に比して文章簡略である。次に、

土肥梶原を先として、数万騎の軍兵を引率して、鎌倉を立て、すでに信濃國善光寺へつき給ふ……

とある。覚一本と順序が反対である。

百二十句本には、

じゆゑい二年二月廿二日……(宗盛内大臣

辞退の事)、そのころ木そとひやう衛のすけとふくわいの事いできたる、ひやう衛のすけ木そをうたんとて、六万よきをあひぐしてしなの、國へはつかうす、木そこれをきき、めとのいま井四郎かねひらをもつて、なにゝよつてかよしなかをうたんとは候やらん、たゞし十郎くらんどのこそ、それをうらむる事あつて、これにおはしたるを、よしなかさへなきけなくもてなし申さん事いかんぞや

とあつて、類する所がある。次に本書は義仲、小冠者義重を頼朝の許に送る、この條は、十一さいになる小冠者に、海野望月諏訪藤沢などいふむねとのつわ物を付て、兵衛佐のもとへつかはす、諸は意趣なかりけり、頼朝いまだ成人の子もたず、さらば子にし申さむとて、しみづの冠者をあひぐして鎌倉へこそ帰られけれ

とある。覚一本と同文である。よつて本書は

覚一本の同類本と認むべきであらう。

次に甲斐源氏せきとの五郎信光が清水冠者をむこにとらんと願つたのを、義仲が許容せず、よつて義仲の謀叛を頼朝に告げた由があ

る。この事は長門平家物語卷十三によつて書

かれたものであらう。但しその人物は武田五郎信光とある。覚一本等、八坂流本の諸本にも見えない記事である。覚一本を基として他の伝本による改訂を示す記事である。

又平家の北國下向の武將の人名も覚一本と差がある。その順序も差がある。

(経正竹生嶋まふで)

○経正知度などは、あふみのあふみの國塩津海津にひかへられたり、遙かの奥なる嶋を見給ひて、藤兵衛尉有範をめして、あれはいづくぞととひ給へば、あれこそ竹生嶋にて候へと申ば、いざやまいらんとて、さぶらい六人めし具して、こふねにのりて、かの嶋へぞ参られける、比は卯月中の八日の事なれば……(経正の詩歌管弦に長じた由を缺ぐ)とあり、以後は大略覚一本に同文である。よつて覚一本を基とした改訂文である。

(ひうちが城のかつせむ)

最初は、

さる程に先陣は越前の國木のへ山をうちこえて、ひうちが城へぞよせたりける、此城

郭にこもる勢平泉寺の長吏齋明威儀師……

とあつて、覚一本と少し差がある。城中にもる勢も、富樫、林とあつて、覚一本の富樫入道弘誓、林六郎光明あるに比して簡略である。五月一日(五月八日覚一本)、平家はその國しの原にて着到し、十万余騎を二手に

わかつ、維盛、通盛、行盛、経正などは、七万よきを引率して、加賀と越中のさかいなる

となみ山へむかはれた。木曾は越後の國にあつて合戦の手分をする。大略覚一本と同文。

(羽生の八幡の願書)

○木曾殿の御まへに畏て、願書をかゝんとす、あつはれ文武二道の達者かなとぞ見えたりける、此覚明は、もとは藏人光弘とて、勸学院にありけるが、出家して西乗房信救とぞ名乗ける……

とあり、経歴及び装束のこと願書の前にあり、覚一本と順序異なる。

願書の語句には覚一本と少し差あり。

ひそかに彼暴悪を見るに(百二十句本同じ)

一陣におみて旗を(百二十句本同じ)
歡喜の涙をおとし(百二十句本同じ)

斧をとりて(百二十句本同じ)

幽玄(百二十句本)

右の如く覚一本と異り百二十句本と同文である語がある。百二十句本と関係があらう。

○木曾馬よりおり、かぶとをぬぎてこれはいす、つわ物共かくのごとし、平家の先陣もこれを見て、身の毛よだちけり(覚一本なし)本書の増補か。

○むかし神功皇后、新羅をせめ給ひし時も、靈鳩楯のおもてにあらはれて、すなはち勝事を得しめ給ひき(百二十句本に類する)

○(頼義)神火なりとて火を放つに、靈鳩火の中にあらはれて、つゐに貞任宗任うたれにけり、木曾此等の先蹤を思出で、靈鳩をはいしける心のうちこそたのもしけれ傍線を付した所は百二十句本に類する。頼義、百二十句本は八幡太郎義家とする。
(となみ山くりからのかつせん)

○源氏方より十五騎を出して十五のかぶらをかたきの陣へ射入さす、平家又十五騎を出して、十五のかぶらを射返す

覚一本より簡略である。本書の本文は、語りより変化した性格であらうか。

俱利伽羅合戦の本文は覚一本と差があるが、内容は大同同じである。

(しのはら合戦)

○次の日眞下の四郎がもとによりあひたりける時〔浮巢三郎がもとによりあひたりける時〕。篠原合戦の條、

○樋口次郎兼光、落合五郎兼行、三百よきにておしよせ、時をどつとつくる、平家の方より、はたけ山の庄司重能、小山田の別當有重を先として、五百よきかけあはす、さむく[△]にた[△]かひ、郎等あまたうたせて、かなはじとやおもひけん、畠山ひきしりぞく所に、高橋の判官長綱、五百よきにてす[△]んだり、今井四郎兼平一千余騎にてかけあはす、源平たがひにみだれてた[△]かひける、六月一日草木もゆるがずつたる日に、こ[△]をさいごとた[△]かへば、へんしんよりあせ出て、水をながすかごとく也、平家の方の軍勢は、國々のかりむしやなれば、ていたくかけられて皆散々に落にけりとなる。覚一本と大差がある。覚一本は五月二十一日とする。

次に高橋判官長綱と入前小太郎行重が戦ひ

長綱が討たれる。ここは大略覚一本と同文。次に平家方の武者、越中の次郎兵衛盛次以下六人、源氏方の武者、仁科以下五人かけあはす。平家敗北して、武蔵三郎左衛門有國討死する、この條も覚一本と本文差あり。

(実盛のうたれ)

○あをちのにしきのひた[△]れに、もえぎおどしのよろいきて、こがね作の太刀をはき……(赤地の錦の直垂にもよぎおどしの鎧きて、くはがたうたる甲の緒をしめ、金作りの太刀をはき……覚一本)

○手柄の太郎かなさしの先守となりのて、おしならべてくまんとする所に、手柄が郎等主をうたせじとはせふさがり、むんずとくんでどうとおつ……

とあり、上なる眞盛の首を取る。簡略である。眞盛の首を木曾の前に持ち来たり、名のらざる由を告げる。義仲の述懐がある。錦の直垂の事がある。次に俣野五郎以下、平家方の武士の討死を述べて、

○さむぬる四月にくだりし時は十万余騎、いま六月にかへりのぼる勢、わづかに二万よき、ながれつくしてすなごる時は……

は覚一本に類する。次に宗盛の哀しみ、平家一門の歎きを述べ、上總介忠清、飛彈守景家の思死を述べる。

六月一日、神祇大輔大中臣親俊を召し、大神宮行幸あるべき由を仰せ下される。覚一本(百二十句本あり)の蔵人右衛門權佐定長の名なし。

○垂仁天皇の御宇(崇神天皇の御宇、覚)は覚一本の誤りで、百二十句本も垂仁天皇とある。一方流々布本も垂仁天皇。

○天平十五年閏十月にはじめて太神宮へ行幸なりたりけり、今度もその例とぞきこえし、彼広嗣うたれて後、その亡霊あれて、おそろしき事共おほかる中に、天平十八年六月十八日、太宰府の観音寺供養……

とある。覚一本と差がある。天平十五年閏十月は覚一本、百二十句本なし。後の天平十八年は盛衰記、百二十句本同じ。(扶桑略記)。頭墓は本書、納頭墓とある。以上覚一本と本文差がある。

(山門の牒状返牒)

○木曾の冠者義仲、度々のかつせんにうちかつて、東山北陸兩道を二手にわけてそのほ

りける、先陣はおはりの國洲の俣につく、

我が身は北國より上げるが、越前の國府にて家子郎等をめしあつめて評定しけるはとあつて、増補したか。覺一本は、

木曾越前の國府について、家子郎等めしあつめて評定す。

百二十句本は、

木曾はゑちぜんのかうについて、かつせんのひやうちやうあり、井のうへ九郎、たかなしのくはんじや、山だの次郎、にしなの二郎、ながせのはんぐはんだ、あかつまのはんぐはんたい、ひぐちの次郎、いま井の四郎、たての六郎、ねの井のこやたいげ、しかるべきものども百人ばかりまへになみゐたりけるにむかつて、きその給ひけるは

(天理圖書館藏佐々木本、同文)

とあつて他の諸本と差がある。

牒状のはじめに、

源義仲言上、殊合力をかうふり、平家の惡逆を停止せしめんとほつする事とある。覺一本なし。百二十句本もなし。盛衰記によつたか。

○心々に意趣さま／＼也けれ共(おもひ／＼

異儀まち／＼也、覺一本、百二十句本)

○近年よりこのかた、惡行てうくわせるあひだ、四夷みだれおこる、万人これをそむく……仏神おうごをくわへず、運命するにのぞめるによつてなり、源氏は……

覺一本と差あり。百二十句本とも差あり。

延暦寺の返牒のはじめに、

延暦寺の大衆等、謹御書狀一通、速平家值遇の會議をひるがへし、源氏あんおむの御いのりをいたすべきよし子細の狀に載せらる

とある。覺一本等なし。

又返牒の次に、

木曾、又家の子、郎等めしあつめ、覺明に此返牒をよませて聞つゝ、大に悦て、先陣を天台山へのぼせんとす

とある。覺一本等なし。本書のみの異文か。

次に平家の延暦寺への連署の牒状がある。牒状の前に、

○興福園域の衆徒は、鬱憤をふくめるおりふし也、かたらふ共なびくまじ、山門は當家のために阿黨をむすばず、當家又山門のため不忠を存せず

とある。覺一本を基とした改訂文である。連署の文中に、

ひさしく鎮護國家(百二十句本)

身の過を悔ず(百二十句本)

且うは累代……かつうは當時(百二十句本)

これらは百二十句本に類し、

○これをもつて一向天台の仏法に帰して、不退に日吉の神恩を恃たも、いかにいはんや……あらたに円実頓悟の教に値遇す、彼はむかしの遺跡也、当家は日吉の社、延暦寺をもつて、家のため榮幸をおもふ、此は今の祈誓也

これは覺一本と差がある。又明雲僧正がこれをあはれみて、

○七日にまんずる日、これをひらいて衆徒にひろうせられける、不思議なりし事は、もとはあり共おほえざりし一首の歌、礼紙にありけり、

たいらかに花さくやども年ふれば西へかたぶく月とこそなれ

まことにたゝ事共おほえず、山王の御詠歌とぞ人申ける、年ごろ日ごろのふるまひ、

神慮にもかなはず、人望にもそむきければ、
ちからおよばす……

とあり、覚一本とも異なる。百二十句本は覚
一本と同文である。本書は改作したものと認
められよう。

(平家の宮古落)

○七月十八日、筑後守貞能鎮西より上洛す

(七月十四日、肥後守貞能……上洛す、覚
一本)、盛衰記も十八日に肥後守貞能上洛。

吉記、六月十八日に、「肥後守貞能入洛、軍
兵纔千余騎云々」とある。

○菊池原田が黨類をあひ具してかへりのぼる、
みな帰伏のよし申、……源氏は日にしたが
ひて勢ついて、すでにせめのぼるよきこ
ゆ、平家はふせぐべきちからもつきはてて、
いまは都に跡をとめがたくぞ思はれける、
院内をひき具しまいらせて、西國のかたへ
おち下らむとぞ議せられける、同廿二日の
夜、六波羅辺大にさはぐ、京中又しづかな
らず、こはいかにしつる事やらんとぞあは
てける、帝都名利の地、鶏ないて安事なし
……。

とある。覚一本と大差がある。七月二十四日

の夜、宗盛は池殿に参りて建礼門院にあひ、
女院に西國行幸を語る事、又法皇の鞍馬への
御幸、二十五日、摂政(藤原基通)の供奉な
ど覚一本と差がある。

○摂政殿も供奉し給ひたりけるが、東寺のま
へにて、ひんづらゆひたる童子、御車のま
へをつとはしりすぐるが、

いかにせん藤のうら葉のかれ行をたゞ春
の日にまかせてやみん

と申こゑ、摂政殿の御耳にきこえければ、
こはいかにとおぼしめし、彼童子を御らん
ずれば、左の肩に春日といふ文字ぞあらは
れたりける、さて彼童子かきけすやうにう
せにけり、春の日とかいて……

とある。傍線を付した所はその差である。こ
れは覚一本を基として改めたものと認められ
よう。この改訂は単なる語りの変化とのみは
推定出来ない。語る盲人の人々の側に改訂、
又は増補する人の存在を認むべきで、一方流
の平曲と八坂流平曲との混交が推定せられる。
又八坂流内にも流派が存在したことがあつ
たので、それらの語りを伝へる伝本があつた。
然し現存するものは極めて少いので詳細は不

明である。(八坂流の甲類、乙類の研究は未
だ不十分で将来の研究にまつ)

○平家都をおつるとて、六波羅の池殿、小松
殿を始として、めん／＼の家々に火をかけ
たれば、京白河くろけぶりとなつて、日の
光も見えざりけり

あるひは主上臨幸の地也、鳳闕むなしく礎
をのこして、あるひは后妃遊宴の砌なり、

……(覚一本の聖主臨幸の章)

とあつて、次に、

主上外戚の悪徒にとらはれて、西海へおも
むき給へり、摂政殿は吉野のおくとかや、
源氏はいまだ入かはらず、此都はすでにぬ
しなき都とあれば……聖徳太子の未来
記にもけふの事こそゆかしけれ

とある。覚一本、百二十句本の巻八の巻頭の
文である。記述の順序も覚一本と差があり、
改作の跡を示す所である。次に維盛の都落が
ある。本書には章段の名をあげない(目録に
なし)。覚一本によりて章段を示すこととす
る。

(維盛都落)

○北のかた、おさなき人々こしらへおかんと

し給ふ程に、とみにも出やりたまはず、誠に心ぐるしきさまなり、三位中将、北のかたにの給ひけるは、人々に具して西國へおち下らんとす、いづくのうらへも具したてまつるべけれ共、……北のかたとかくの返事もしたまはず、ひきかづきふし給へり、此北のかたと申は、故中の御門の新中納言成親の卿の御娘也……

とあり、文の順序、覚一本と異なる。次に、

○北のかた、袂にすがりの給ひけるは、年ごろ日ごろは心ざしあさからず見え給ひしかば、いまゝではさり共とこそたのもしくおもひつるに、いつのまにかはりにける心ぞや、いかならん所までもとないたてまつりて、草葉の露共きえ、ひとつそこのみくづ共なりなんとこそちぎりしに、都にはちゝもなし、母もなし、あはれをかくべき人一人もなし……

とある。傍線を付した所は百二十句本に類する。覚一本と差あり。故に二十句本と関係があらう。百二十句本成立の前か、後かといへば、百二十句本成立の後ではなからうか。

○三位中将（維盛）……ひかへくぞなかれ

ける、人はいつの日のいつの時たちかへるべしと、その期をたのみおくだにも久しきぞかし、いはんやこれをかぎり、たゞいまばかりの事なれば、行もとゞまるも、たゞつきせぬ物は涙也（覚一本なし、百二十句本に類する）。次に北方は齋藤五、齋藤六を先にたて、遍照寺のおく大覚寺にしのばれる、この條は覚一本、百二十句本なし。

（忠度の都落）

○忠度、見参に入て申べき事あつて、道より帰りまいりて候、門をばひらかれ候はず共、此きはまでたちよらせ給へとの給へば

覚一本と差あり、百二十句本に類する。

○たゞ一身のなげきと存候、君すでに都を出給ひぬる上は、かばねを山野にさらさん事うたがひなく候、それにつき候ては、世しづまり候はゞ、さだめて勅撰のさた候はんずらん、此うちに一首なり共御恩をかうぶりて……

傍線を付した所は、覚一本と差あり、百二十句本に類する。

○忠度手を合て悦、馬にうちのりて出られける、三位はるかに見をくりてたゞれるに、

薩摩守のこゑとおほしくて、前途程とをし、恩を雁山の夕の雲に馳とたからかに口号給へば、ゆうにやさしくおぼえて……。

とあり、覚一本より簡略である。

（経正都落）

○経正十一さいより此御所へまいりはじめて、夜ひる御前に候て、御あわれみをかうぶり候しかば、おのづから身にいたはる事の候はぬほかは、あからさまにしゆくしよへまかり出る事も候はず、されば十三のとし叙爵仕てのちも、つねはまいり候き、けふ都を出候なんのちは、いきて二たびまいるべし共存候はず

とある。覚一本と差あり、百二十句とも差あり。

○百二十句本に

十三にてげんぶくつかまつり候しまでは、あいいたはる事の候ひしよりほかは、御まへをたちさる事も候はざりしに、けふよりのち、いづれの日いづれのとき、かへりまいるべしともおほえざる事こそ、くちおしう候へ……（百二十句本の影響あるか）とある

（青山之沙汰）

經正の宇佐宮勅使の時、

○神殿にして法樂のために、せいかいらくをひき給ひけるに、神明感にたへずして、天童のすがたにあらはれて見えさせ給ひければ、經正ひきける樂をとゞめ、三曲の其うち、りうせんの曲をひきければ、いつきゝなれたる事はなけれ共、ともの宮人をはじめて、上下感涙をながし、緑衣の袖をぞしほりける

覚一本、百二十句本と差がある。青山の琵琶の條、

○仁明天皇の御宇、承和十三年夏のころ（覚

一本、嘉承三年の春、百二十句本同じ）

續日本後記、承和二年十月。盛衰記卷三十一には承和二年とある。

○村上の聖代、天徳二年八月（應和のころ、

覚一本、百二十句本）

中院本、天徳四年の秋のなかば、長門本、盛衰記、延慶本は年時を示さない。

（頼盛都留り）

○頼盛は、殿にはかけて、その勢三百よきにうち出られけるが、何とか思はれけん、

鳥羽の北の門より、あかじるしみな切すてゝ、都へとつかへされけり、越中の前司盛俊これを見て……とかくいふに及ばずとぞの給ひける

覚一本と異なり、傍線を付した所は百二十句本に類する。二十句本の影響か。

頼盛の事の次に東國の大名、宇津宮の左衛門尉朝綱、畠山庄司重能、小山田別當有重の事がある。覚一本は、聖主臨幸の章の次に出す百二十句本は本書に同じ。

次に平家一門の人々の名が上げられる。その順序は覚一本と少し差がある。

○南無八幡大菩薩、君をはじめまいらせて、今一度都へ返し入させ給へと、平大納言以下、一同にこゑをあげて手をあわせ、いのられけるこそあわれなれ、各都のかたをかへり見れば、かすめる宮の心ちして、けぶりのみ心すぐくぞたちのぼる、修理大夫経盛、

はかなしやぬしは雲井をわかるれば宿はけふりと立のぼるかな
さつまのかみ忠度、

古郷をやけ野の原とかへりみてすゑもけ

ぶりの浪路をぞゆく

まことに古郷をば一片の煙塵にへだてゝ、前途を万里の雲路におもむかれけん、人々の心のうちこそかなしけれ

とある。本来は覚一本の如く、教盛、経盛の歌とあつたのであらう。百二十句本は、つねもり、たゞのり、中院本は、たゞのり、つねもり。次第に流動したと思はれる。盛衰記は忠度、経盛とある。

肥後守貞能の京上りについて

○西國のかたへ下らせ給ひて候共、あんをんにやわたらせ給ひ候べきか、おちうどとてたれあはれみたまてまつるべき、ちりぐくにうちなされ給はん事こそくちおしく候へ、都にてともかくもならせ給ひ候はめ、これより御帰り候べしと申ば……とある。覚一本とも大差がある。

福原落の所、

○ゆくもとまるも、たがひに袖をぞしほりける、老たるも若もうしろをのみかへりみて先へはすゝみもやらざりけり、あるひは磯辺の浪の梶枕、八重の塩路に日を暮し、名にのみ聞し難波方、入江漕行かいのしづく

涙にあらそひて、袂もさらにほしあへず、
あゝ、ひはこやの生田にかゝりつゝ、とをき
をわけ、けはしきをしのひで、駒にむちう
つ人もあり……

とある。傍線を付した所は、百二十句本に類する。傍点の所は寛一本百二十句本なし。宗盛の語に、「恩波によつて私をかへり見き、樂つきて悲きたる、いかんぞ思慮をめぐらしで、はうをんを報ぜざらんや」も百二十句本に類する。

○すだれたえて、ねやあらはなり、人々、入道相國の墓所にまふで、過去聖靈、出生死、頓證菩提とぞ廻向し給ふ、さつまのかみ忠度、眺望の御所の花をおり、故入道殿に手向つゝ、涙かきあへず、

なき人にたむくる花の下枝をたをれば袖のしほれぬるかな

と詠ぜられければ、みな人袖をぞしぼられける、あけにければ、里内裏よりはじめて……

とある。清盛の墓まうでは他本になく、源平盛衰記卷三十二の記事によつたものか。

○都を出し程こそなけれども、これもなごり

はかなしかりけれ、九重の内を出させ給て、八重のしほちにおもむき給ふ、玉の台、錦のしとねを引かへて、海土のとまふくすがむしろ、おしはかられて哀也、浦々島々漕行ば、あまのたく薄の夕煙……

とあり、寛一本と大差がある。

卷末に藤原仲鷹の事がある。他の平家物語にはなし。本書の補記か。

以上、巻七を要約すれば、寛一本を基として、八坂流の語りを加へて、他の伝本（百二十句本）、盛衰記などを参考として、成立した伝本といへようか。

卷 八

（法皇山門へ御幸）

○寿永二年七月廿五日、^四平家都をおちはてぬ、

法皇はくらまにわたらせ給ひけるが、これをもなを悪かりなるとて、さゝのみね、やくわう坂などいふさかしき山をこえさせ給て、横川の解脱谷、寂定坊へぞ入らせ給ひけるとある。寛一本と大差がある。

○建礼門院の中宮ときこえさせ給ひし時、中納言の内侍とて候はせ給ひけるが、内の御

かたへしのびつゝまいらせ給ひけるほどに、うちつゞき皇子三所まで出させ給ひにけり、信隆卿は、平家のあたり、中宮の御気色をもふかくをそれ申されけるあひだ、御めのとのさたまでもなかりけるを……

とあり、紀伊守範光の逸事。及び二首の和歌なし。百二十句本に同じ。

次に寛一本は、八月十日の除目、平家太宰府到着がある。本書は後に出す。

（位あらそひ）

一の宮惟高親王の御持僧、二の宮惟仁親王の御持僧をまづあげ、次に両親王の人物評を述べることは寛一本（百二十句本）と異なり、改作したと認められよう。中院本は二人の親王の御持僧をあげて人物評なし。

次に寿永二年八月十日、院の殿上にて除目行はれ、義仲行家の任官、ついで十七日平家太宰府到着のことがある。寛一本は名虎相摸の事の前にある。

（平家太宰府落）

○つくしにはすでに内裏つくらるべしなどとして、大臣殿以下の人々すこし安堵し給へり、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿ともい

ひつべし、人々の家々は、野中田中なれば、

麻の衣はうたね共、十市の里とも申つべし、

かゝりし程に、主上をはじめ参らせて、女

院内府以下一門の卿相雲客、みな宇佐の宮

へぞまいられる、

寛一本(百二十句本)とも差がある。次に九

月十三夜の條も、

○十三夜は名を得たる月なれども、都をおも

ひ出たる涙に、われからくもりてさやかな

らず、さるまゝには、修理大夫経盛、恋し

とよ去年の今宵の夜もすがら契し人の思出

られて

とあつて、歌の順が、経盛、忠度、経正であ

る。

○惟能やがて数万騎の兵を引具して、太宰府

へはつかうせんとす、平家はを聞て、あは

てさはぎ給ひけり、今はかたのごとく内裏

つくり出して、此一両月はすこし人々心安

堵して、源氏ほろぼすべき議定より外は他

事なかりつるに、こはいかにしつる事ぞや

と、東西をうしなへり

とある。寛一本と差あり。百二十句本とも差

(左中将清経身投)

寛一本と差なく、次に北方の物語がある。

百二十句本等にもなし。中院本には、

○左中将清経は、都に北の方をとゝめをきて、

いでられるが、せめてのなごりにや、び

んのかみを一むらきりて、とゞめをかれけ

るが、ある時北のかたより、風のたよりに

御ふみあり、あけて見給へば、かみを一む

らまきぐせられたり、一首の歌をぞをくら

れたる

見るたびに心つくしのかみなればうさに

ぞかへすものやしろへ

とかきて、おもひのつもりにや、程なくう

せられけるとぞきこゑし

とある。本書は詳細である。(盛衰記卷三十

三の記述によつたのであらうか。)

北のかたと申は、冷泉の大納言隆房卿の御

娘、中将は十六、北方は十三より、ことは

六年にぞなりにける

とある條は他本なし。長門本なし、延慶本は

簡略である。

(屋嶋内裏立)

のありきまでも、さこそは物うく思はれ

けめ、平中納言教盛の卿、かくぞくちずさ

み給ける、

栖霞れし都のかたはよ所ながら袖に浪こ

す磯の松風

傍線を付した所は寛一本、百二十句本なし。

盛衰記にもなし。

(征夷將軍の院宣)

本文は大略寛一本に同じ。院宣の書状があ

る。寛一本等になし。長門本、盛衰記にあり。

盛衰記によつたか。頼朝の應對の語に、

○そのあとに義仲行家うち入て、我高名がほ

に恩賞を蒙る事いかん、剩國をきらい申候

らん事、奇怪に候、官加階して候なれ共、

頼朝が書状には、十郎藏人、木曾次郎とか

きて候へば、返事はしてこそ候へと宣処に、

おりふし聞書到来の事あり、兵衛佐是を見

て大に心得ずげなり、秀平が陸奥守になり

候とて、頼朝が命にしたがはず候事、不思

儀におぼえ候也、追討せよといふ院宣を下

さるべくや候らんと申さる

とある。寛一本と差がある。

刀に、九さしたる篋矢具してたぶ、にかけ駄卅疋、家の子郎等にいたるまで、小袖、ひたたれ、馬鞍におよぶ、鎌倉出の宿よりかゝみの宿にいたるまで、宿々に十石づゝ米をおかせて種々の珍物あり

これも寛一本とも差あり。百二十句本とも差あり。次に安貞の上洛、次第奏聞、民部成良の屋島に内裏造營の簡略な記事がある。寛一本には成良の事なし。

次に木曾義仲の猫間中納言との対面がある。○木曾、さらば見参せんとて出合たり、対面の儀式まことにふさた也、先さいせんのこと葉に、根井や候、ねこ殿のわいたるに、

物まいらせよといふ、中納言、おもひもよらず、あるべくもなしとの給へば、いかゞ氣時にわいたるに、物参らせではあるべき、ぶえんのひらたけもありつるに、とくくゝとすゝめければ、中納言よしなき所へも来にけるよ、かばかりの事こそなけれと思ひて、の給ふべき事もはかゞしくもいはれず、興ざめておはす処に……

とある。寛一本、百二十句本とも大差がある。わいたるとあるのは、方言を使用したものか。

木曾の院への参候も、

○ひたゝれにて出仕せん事あしかりなるとて、布衣にとり装束にて、車に乗て院の御所へぞまいりける、着もならはぬ立ゑほしきはより、さしぬきのすて、まことにかたくな也

とある。寛一本、百二十句本と差がある。

(備中國水島合戦)

寛一本、百二十句本と大差あり、内容は大同同じ。

(播磨の室山合戦)

○都より樋口次郎使者をたて、十郎藏人殿こそ院の近習者してさまゝの事共候へと申たりければ、木曾、さては平家をせめても詮なしとて、彼合戦をすてゝ都へはせ上十郎藏人これをきいて、平家と合戦して、木曾と中なをりせんとて、其勢五百余騎、山陰道より下向す

とある。寛一本と差がある。

平家の五陣は、

一陣、飛弾三郎左衛門景経^五三百余騎、

二陣、越中次郎兵衛盛次五百余騎、

三陣、上總五郎兵衛忠光五百余騎、

四陣、伊賀平内左衛門家長五百余騎、

五陣、新中納言、本三位中将一万五千余騎

これは盛衰記卷三十六の陣立に類する。(但し五陣は、門脇中納言八千余騎)。寛一本は、

一陣、越中次郎兵衛盛嗣、二千余騎、

二陣、伊賀平内左衛門家長、二千余騎、

三陣、上總五郎兵衛、悪七兵衛三千余騎、

四陣、本三位中将重衡、三千余騎

五陣、新中納言知盛卿、一万余騎

とある。又十郎藏人行家の合戦も盛衰記に類する。百二十句本は最も簡略である。

(木曾殿京中浪籍)

○平家の時は、そのあたりといひしかば、たゞ大かたのおそろしかりしばかりなり、かほどの事はなかりし物を、平家に源氏かへおとりしたりとぞ申ける、なに者のしはざにかありけん、法皇の御事を申たりとおぼしくて、院の御所の門のまへに、札をぞかいてたてたりける。

赤さいて白たなごいに取かへてかしらにしまくこ入道かな

とある。この條は盛衰記卷三十六の文によつたと認められよう。

鼓判官知康と木曾義仲との対話、知康の院への報告、法住寺殿の合戦準備、今井四郎兼平の忠言、木曾の返答など覚一本と差あり。十一月十九日院の御所へ攻め寄せらる。

○木曾がれるの支度なれば、勢を七手にわちけり、五百よきにて、法住寺殿のひがし、今熊野にむかふ、残る六手はおのゝ居たらん條里、小路よりかはらに出て、七條が末にて一つになり、其勢三千余騎也、院の御所には、参りあつまる物共二万よきとぞきこえし

とある。次に鼓判官の扮装、振舞がある。大略覚一本に同じ。

○東の手、今熊野のかたより、今井四郎五百余騎にて、時のこゑをあはす、南西の門のまへ、やがてせめよせてたゝかふ、御所中には、二万よ人の者共、時のこゑもあはせず、ふるひおのゝきはてさはぐ、御所の北の在家に火をかけたれば、いぬゐの風はげしくふいて、猛火御所へおしかけたり、行事の知康みなみへむかつておちにけり、いくさの行事おちければ、残る物もなじかはたまるべき、我さきにとおちまじふ……

とある。傍線を付した所は盛衰記によつた文であらう。

以後の記事は覚一本に比してやゝ簡略である。

（法住寺合戦）

○南の門固たる河内守光仲、舍弟藏人大夫仲兼落ざりけり、錦織冠者義広つかいをたてゝ、和殿はらはなを守護して居給ひたるぞ、御奉も行事も他所へなりぬ、誰をまほりたてまつるべき、御所に火かゝりたりといでければ、河内守弟藏人大夫、我身共に八騎にて河原坂の方へおちて行程に、河内のくさか堂に加賀房といふ法師武者ありけり……

とある。覚一本は西の門、近江守仲兼、山本冠者義高とあり、盛衰記卷三十四には、河内守光助、錦織冠者義広とあり、仲兼の郎等に加賀房といふ法師武者ありとある。本書は盛衰記と関係があらう。加賀房は仲兼の馬に乗りかへて討死する。その馬を見て、仲兼の子、信濃十郎頼直は主の討死と思ひて敵中に討死するといふ逸話がある。

法住寺殿の合戦の後、十一月二十八日、木

曾義仲は、公卿等の官職を停止して四十九人に及んだ。覚一本は十一月二十三日とある。百二十句本も廿三日とする。盛衰記は二十八日。百鍊抄には二十八日とある。本書は盛衰記によつたか。

鼓判官知康は、鎌倉に下り、頼朝に對面して合戦の事情を訴へんとしたが叶はず、院に歸りて参候するも詮なしとて鎌倉に隠れたとある。覚一本は都へ歸り稻荷の辺にて命ばかりいきて過したとある。

最後は、

○平家は西國に、兵衛佐は鎌倉に、木曾は都に、あぶなながら、ことしもすでに暮にけり

とあつて、巻八を終る。

以上巻八をみるに覚一本とはかなりの差があつて、一方流本からは遠ざかり、又百二十句本とも大差があり、盛衰記などの影響をうけて改作した伝本といふべく、語り本としての性格よりいへば、八坂流の珍しき伝本といふべきであらう。

これにつけても注目すべきは、百二十句本の性格で、巻八は殊に甚しく覚一本と異なる

本文である。八坂流本の一例として法住寺合戦の章の一節を示めさう。

源くらんどなかかね、かはちのかみなかの
ぶきやうだい、そのせいそのせい百きばか
りにて、さんぐにたゝかひけるが、七八
きにうちなされひかへたるところに、あふ
みげんじ山もとのくはんじやよしたかが、
ほうちうじとのにふせがれけるが、これを
見て、いまはをのくたれをかこはんとて、
いくさをばし給ふぞや、きやうかうも御か
うもはやたしよへなりぬる物をと申ければ、
さらばとて、みなみをさしておちぞゆく、
源くらんどがらうとう、かはちの國のぢう
人、くさかのかゝばうといふほうしむしや
ありけり、

傍線を付した所は覚一本にない語である。傍
点の所は覚一本の語である。かくの如く、覚
一本を基として、増補や改訂が行はれて、八
坂流本の本文が流動して行つたと認められよ
うか。平家物語十二巻全般にわたつて検討す
べきである他に、かくの如き八坂流の伝本は
数多の八坂流の伝本のうちの僅かの伝本が現
存してゐて、他にあつた多数は絶えてしまつ

たと認められる。これが八坂流の語りの経過
を詳細にできない所以である。天理図書館蔵
の佐々木博士旧蔵本も百二十句本に近い伝本
である。両本の比較、考察も必須である。

補記

古典文庫所収、相模女子大学蔵『平家物語』は弓削繁氏編。上は(第一―第四)第六
〇七冊、平成九年六月二十日刊。中は(第五
―第八)第六一―一冊、平成九年十一月刊。下
は(第九―第十二。解説、参考文献)第六二
二冊、平成十年九月二十日刊。

校正は次の六人の大学院生が担当した。

井出恵子	荒瀬康成
川人澄子	伊藤大介
横谷一子	高場秀樹

